地域医療福祉と音楽活動――関係性の蘇生としての協働と創造

嶋田 久美

要 約

現在、医療福祉の領域では、治療やケアの一環として音楽活動が様々に取り入れられている。本論文は、医療福祉にかかわるそれらの音楽活動の特性を、「協働性」という観点から明らかにすることを目的とするものである。

医療福祉にかかわる音楽活動は、従来、音楽療法の枠組みのなかで検証されてきた。現代の音楽療法は第二次世界大戦頃に誕生したが、当初は、音楽が人体に及ぼす生理的効果を科学実証的に解明する数量研究が主流であった。だが、1980 年代を境に、それまでの科学実証主義への偏重に対する反省から、クライエント（患者・被支援者）が置かれた個々の社会的・文化的状況に即して療法の意義を捉え直そうとする質的研究の動きが活発化する。さらに今世紀に入り、この音楽療法の見直しの動きは、「コミュニティ音楽療法」（CoMT）の提唱へと結実する。CoMT とは、音楽療法の実践の場を病院や福祉施設などの閉ざされた空間から地域社会へと積極的に開こうとする考え方、ないしその考えに基づく実践の総称であり、イギリスと北欧の音楽療法士らによる提唱を皮切りに議論が国際化した。

CoMT 提唱に至る背景には、昨今、各国の医療福祉政策で推し進められている地域医療やコミュニティ・ケアにみられる「コミュニティ」や「地域」という視点の重要性の高まりがある。つまり、治療やケアを必要としている人びとを特別な施設に長期的に隔離収容するのではなく、地域社会のなかで地域社会とのつながりを保ちながら支援することが目指される。それに伴い、音楽療法士も他の医療福祉職と同様に地域社会へと積極的に働きかけていく「ファシリテーター」としての役割を担うこととなる。この役割の変容により、音楽療法の実践は、従来の「治療者－患者」という医療的な二者関係モデルに立脚し続けることが実質的に困難になりつつある。CoMT はいわば、「施設を出て地域で暮らす」という現代のケアシステムの方向性に対応していくための施策として考案された概念的枠組みである。

このようにケアシステムが転換期にあるなか、従来の「治療者－患者」という医療的な二者関係をより広い文脈に開くものとして CoMT が提唱され、各地で実践されている。とはいえ、CoMT では、施設の外に実践の場を移すこと（音楽療法の「脱施設化」）が必ずしも主眼にあるわけではない。問題となっているのは、従来の医学的な治療観のもとで役割や方法論が固定され膠着状態に陥っている医療環境とそこでの「治療者－患者」ないしは「支援者－被支援者」という関係性をいかに見直していくかであり、音楽活動はそのような関係性の改善や再生のための媒介となりうる。そこから浮上するのは、被支援者一個人だけでなく、その人を取り巻く人間関係のネットワーク全体に動きをもたらしうる音楽活動の可能性で

ある。それは、従来の医学モデルに基づく音楽療法の域を超えており、支援者－被支援者という二項では語りきれない協働性を呈している。本論文のねらいは、このような支援関係のネットワークに働きかける音楽活動の協働性と創造性の諸相を明らかにしていくことにある。

本論文は、序論と結論を含む八つの章からなる。近年の音楽療法およびケアシステムの動向と本論文の意図との関連を概観する序論に続き、第一章においてまず、CoMT を参照点として、音楽活動の協働性を考えるうえでの課題を抽出し、第二章からは、その課題を具体的に検討するために、狭義の音楽療法にとどまらない脱療法的な活動も含めた多様な事例とそれに関連する諸概念をとりあげ、ケアや障害に関わる音楽活動の協働性と創造性について多角的に論じていくという構成をとる。以下、各章の概要を述べる。

第一章では、CoMT 提唱者らが「コミュニティ」という観点を打ち出すことで、従来の音楽療法のあり方をどのように乗り越えようとしているのかを明らかにした。CoMT は当初より、音楽療法の文脈のなかで「生態学的実践」として位置付けられてきたが、そのことが示唆するように、CoMT の特徴のひとつは、個人をミクロからメゾ、マクロへと幅広い次元から捉える「生態学的視点」にある。そのとき音楽活動は個人と地域社会との紐帯を生み出すための媒介として機能し、ゆえに音楽活動への参加は社会包摂の手段とみなされる。ただし、音楽活動への参加をめぐる浮上するのは、文化的他者といかに対峙するかという問題である。CoMT ではこの問題について看過されているため、近年の社会包摂／排除論を参照しながら、文化的他者と音楽活動を行ううえでの課題をさらに検討した。そのうえで、社会学者ジョック・ヤングが示唆するように、他者をメインストリームに同化・適応させるのではなく、既存のカテゴリーを問い直し、自己と他者をともに変容させていくという「変容力のある包摂」を模索していくことの重要性を指摘した。

第二章では、従来の音楽療法における「セラピストとクライエント」という医療的な二者関係モデルにどのような問題があるのかを、音楽療法士の音楽聴取の諸技法と方法論を横断的に分析することで明らかにした。従来の個人主義に基づく音楽聴取の仕方には、人間の内面性と音楽的パラメータを関連づけることによって療法的効果を同定するという表現病理学的な還元主義と、さらにその根底に、音楽現象を採譜可能な記号とみなすテクスト還元主義が確認された。それら慣習の問題点は、音楽表現の解釈が特定の美的規範のもとでの「基本形とその逸脱」という見方に収れんしてしまうことにある。よって、音楽表現を問題行動に結びつける個人主義的・表現病理学的な還元主義からいかに脱却するかが重要な鍵となることを指摘した。

第三章では、近年の障害パラダイムとの関連から音楽活動の協働性について考察した。世界保健機関による国際生活機能分類（ICF）と障害学における「社会モデル」の登場により、音楽活動と環境との関係性をどのように見直していけばいいのかを、アメリカの NPO「ミュージック＆メモリー」（M＆M）による認知症ケアのための音楽プロジェクトをめぐる議論を手がかりに検討した。ICF と「障害の社会モデル」が示唆するのは、障害を捉えるうえ

での環境因子の重要性である。また、M&M の特徴は、施設という空間を構成する諸関係に複層的に介入するソーシャルワーク的なネットワーク形成にある。それらが示唆するのは、環境には（本人以外の）人も含まれるという点である。そのことを踏まえたうえで、CoMT 提唱者らによる「修復的ミュージッキング」という概念の射程を、損なわれた個人の音楽性の回復だけでなく、空間を構成する関係性のネットワーク全体に及ぶものとして捉え直すことで、ソーシャルワークとしての音楽活動の可能性を提示した。

第四章では、音楽社会学者ティア・デノーラによる「音楽アサイラム」という概念を導きとして、施設臨床における音楽活動の課題をさらに検討した。その際、「脱施設化」を指すことが多い de-institutionalization という言葉の射程を「脱制度化」という観点にまで広げることで、かつて社会学者アーヴィング・ゴフマンが問題化した「全制的施設」（total institution）いう空間化の論理を解除するためには、空間に働く関係性を取り除くことと新たに作り直すことの両方の働きが必要となることを明らかにした。そのうえで、近年の CoMT の実践を、病院から地域へという単なる「場所」の移動や拡張としてではなく、音楽と個人の関係性を再編する動きとして捉えていくことの重要性を示した。

第五章では、日本の地域音楽活動の一例として、「神戸音遊びの会」をとりあげ、会がいかに旧来の障害観や福祉観を乗り越えようとしているのかを、会の目的や音楽作りの仕組みの背景にある思想を紐解くことで明らかにした。「音遊びの会」は、CoMT の文脈で紹介され、福祉活動としても評価されている面をもちながらも、それとは異なる価値を打ち出してきた。「音遊びの会」はいわば、「脱療法化」の道を模索する活動であり、その両義的なあり方にこそ、従来の障害と音楽表現との関係性を見直すためのヒントを見出すことができると考えられる。その点でとくに着目されるのは、音楽作りをめぐって人びとのあいだに生じる「関係性の摩擦」である。会の特徴は、「関係性の摩擦」を解消するのではなく、むしろその検証を可能にする音楽づくりの仕組みにあり、そのことが従来の「セラピストとクライエント」という二者に閉じられた療法的な関係性を社会に開くうえでの重要な突破口となりえていることを示した。

第六章では、前章からひき続き、「音遊びの会」を例として、音楽的集合性の倫理的－美的次元について考察した。その際、キュレーターのニコラ・ブリオーによる「関係性の美学」をめぐる近年の論争と、それに関連するフェリックス・ガタリ、およびジル・ドゥルーズによる「装置」概念を補助線として、音楽生成のプロセスにおける「関係性の摩擦」のダイナミズムについて明らかにした。そのうえで、会の独自性として、人と物を介して協働的に音楽表現を見立てていくプロセスにおいて、各々の参加者が有する歴史性が拮抗し合うことで生まれる力が相互変容的な創造性につながっていることを示した。

以上の考察を踏まえたうえで、結論として、医療福祉にかかわる音楽活動の可能性を「関係性の蘇生」の機能に見出し、それを他者の本質化に抗う「戦術的なブリコラージュの力」として総括した。